留学生経験のない地理学者
―私がオーストラリア研究者になるまで―

Geographer without International Student Experience:
Brief History of My Academic Career as an Australian Researcher

堤　純
TSUTSUMI Jun

Ⅰ．はじめに

現在私はオーストラリアの地誌学、もしくは地域研究を担当する専門家として筑波大学で教鞭を執っている。大学院生時代だった1994年に２週間ほど私的にオーストラリアを旅したことはあったが、本格的にオーストラリアを研究対象としたのは2002年からであり、私が32歳の時である。こんな遅いスタートとなった私の海外研究であるが、その遅れを取り戻すべく、毎年ほぼ２回はオーストラリアに出かけ、他にも１か月、３か月、６か月にわたる現地滞在の機会を得ることもできた。渡豪回数は優に30回を超え、現地滞在日数は通算で３年程になっている。今では、教科書出版大手の某社発行の中学・高校のオーストラリアの項目の執筆も担当しているほか、オーストラリアに関する学術書[1]も刊行した。私は「オーストラリアのことを研究している人」というような印象が学界では強いのかもしれない。

しかし、私の大学院生時代の研究テーマは都市地理学であった。札幌や前橋、長野といった日本の都市を対象に、土地利用はなぜ変わるのか、あるいは、なぜ同じ利用が続くのかということを、土地利用に関する１筆単位の変化に関するデータを詳細に集め、GIS（地理情報システム）で地図化することを通して背景に隠れた要因を考察することを研究手法の柱に据えて研究に取り組んできた。自分の興味関心の基本的な「根」は都市地理学であるという気持ちは、今も昔も寸分も変わらない。

そこで、本稿は、学生・院生時代に留学生として海外に出た経験のない私が、どのようにオーストラリア研究に着手し、最初は手探りの状態から何を頼りに研究の足がかりをつかみ、そして海外をフィールドとする論文を書けるようになったかというプロセスを紹介することを主たる目的とする。本稿が、これから海外研究を始めようと思う反面、迷いにも揺れる若い研究者の背中を、少しでも押すことができるならば幸である。

1　堤　純　編（2018）.

II．オーストラリア研究の契機

私は大学院生の頃（1990年代後半）、海外に留学したいという気持ちを漠然と抱いていた。しかし、周りを見渡せば、欧州や北米の大学院の博士課程に留学し、早くて３年、長ければ５年～８年という長い期間を海外の大学で過ごしている先輩方が周りにいた。かれらはみな現在は大学で教鞭を執っている。逆にいえば、このぐらいじっくり取り組まなければ、海外留学で大成しないと理解していた。大学院生当時は、私の父はすでに定年退職していたので家計に余裕はなく、日本育英会の奨学金とアルバイト収入で一人暮らしをしていた私は、金銭的にも、時間的にも、体力的にも海外留学はできないな・・・と諦めていた。

幸い、20代後半に運良くアカデミックなポストに就くことができたが、渡航費と滞在費というまとまった資金が必要になる海外研究を始める余裕はなく、しばらくは日本国内の都市を対象とした研究を続けていた。ようやく海外研究を始めることができたのは、2002年度に科学研究費（若手Ｂ）を獲得できてからである。

私が海外研究に着手した背景には、もう一つ、「背中を押した言葉」があった。私は2000年から愛媛大学法文学部人文学科地理学教室の講師を務めていた折、教職科目として設定されていた外国地誌と日本地誌、地理学概説といった授業を毎年提供する必要があり、これらは他の同僚教官よりも明らかにコマ数が多い追加の授業負担となっており、いわば手弁当の持ち出しであった。当時はこうした教職専門科目であっても履修者は100人を超える規模であり、負担を軽くする目的から、私は各科目を隔年開講や非常勤講師の担当科目に移行する策を練っていた。そうした動きを知った年配の同僚教官のK.F.教授が、「地理学者は地誌が話せてナンボじゃないか」という趣旨の発言をされた。今となって振り返れば、K.F.教授は私に当該科目の担当を続けてもらいたい（さもないと定年間際のK.F.教授自身が当該科目をエキストラで担当せざるをえなくなるかもしれないことを恐れた（？））だけだったかもしれないが、地理学者として独り立ちを始めた矢先に言われた、地誌を重視すべきという発言は、私の胸には大いに響いた。地誌を担当する以上、自分で海外のフィールドを持ちたい。昔、漠然と抱いてた海外研究への憧れの気持ちに、再び火が付いた。

こうして準備を始めた海外研究であるが、私にとって最初の候補地はオーストラリアではなく、実はカナダであった。それは、それまでに何度か参加して研究発表も行っていた都市地理学の国際学会においてカナダの研究者と言葉を交わす機会があり、また、博士論文執筆時にもカナダの研究者が発表した研究業績を多く参考にしていたからである。しかし、いざカナダをフィールドとしようと想定してみると、大学院の先輩に当たる都市地理学者だけでも２名、他大学出身の都市地理学者も含めるとさらに数人がトロントやヴァンクーヴァーなどを研究対象としていた。また、アメリカやイギリス、シンガポールなどの英語圏の都市は、先輩の都市地理学者らによって「調べ尽くされている」印象が当時はあった。学生・院生時代に留学生として海外に出た経験はなく、就職してから海外研究を始めた駆け出しの（当時としては）若い研究者の私が、先を走る先輩研究者を追い超すなどというのは一生かかっても無理だと思い、目の前が暗くなっ

た。研究として海外にフィールドを求める以上、他の研究者との差別化が必要である。私自身の外国語能力を考慮すると、英語以外の言語での研究は難しいと考えていたこともあり、残るところはオセアニアしかなかった。ニュージーランドに在外研究で滞在し、そこをフィールドにしている先輩研究者は複数いたが、かれらの研究テーマは都市ではなかったので重ならないな・・・と、やや安心した。でも、ニュージーランドは人口が極端に少なく、対象となる都市は少ないな・・・、と感じた。ならばと思い、オーストラリアをみると、東大教授（当時）が全豪を対象とした経済地理、京大教授（当時）がやはり全豪を対象とした歴史地理・文化地理の書籍を当時刊行しており、「もはや詰んだか・・・」と思い、目の前に差した一筋の光さえ消えてしまった気がした。

しかし、不貞腐れて一晩寝てから考え直してみると、「オーストラリア」の「都市」を研究している日本人の研究者は少ないな・・・ということにも気づいた。博士論文のテーマとした都市地理学的なテーマを基軸に据え、都市に関する空間データを詳細に集め、GISで地図化すればなんとかなるのではないかと考えるようになった。私は生来のポジティヴ・シンキングの持ち主なのか、はたまた単純なのか、あるいは鈍感なだけなのか・・・(苦笑)。ただ、オーストラリアならばフィールドになるかもしれないという気持ちを持つことができた。こうして、私は2002年の８月に、オーストラリアのフィールド探しの旅に出た。西海岸のパースに入り、そこからアデレード、メルボルン、シドニー、ブリスベンという５大都市にそれぞれ３泊程度ずつ滞在しながら、自分の持てるアンテナをすべて張り巡らしながら、各都市の生の姿を貪欲に吸収し（ようと努め）た。最終的に、多文化共生都市として名高く、170以上のエスニックグループが暮らすコスモポリタンであり、発表されていた論文数も多いメルボルンを、私の主たる研究対象とすることを決めた。「なぜフィールドを、オーストラリア最大都市のシドニーにしなかったのですか？」という質問をされる機会は今でもあるのだが、その理由は明快である。シドニーは国内首位都市として経済機能が集中しており、人文地理学（都市地理学）者としての私の目には、経済的な因子だけでざっと８割から９割ぐらいの事象の説明が付いてしまうようにみえる。これではニューヨーク、ロンドン、東京と同じ匂いがする・・・。ありていに言って、シドニーにはあまり興味が沸かなかったのである。一方、国内２位の都市ながら、1956年の南半球最初のオリンピック、F1グランプリ、テニスの全豪オープンなど、国際的な大会の多くが開催され、ヨーロッパらしい街並みの中を路面電車がコトコト走り、手入れの行き届いた古い建物も多く残り、落ち着いた雰囲気を醸し出すメルボルンの方に惹かれたのである。他の３都市の魅力がメルボルンを超えることはなかった。

Ⅲ．オーストラリア研究のギアチェンジと加速　―３か月滞在と研究カウンターパートの獲得―

オーストラリアの都市に興味をもってデータを集め始めて約３年が経過した2005年に転機が訪れた。３か月の海外渡航の機会（文部科学省「海外先進教育研究実践支援プログラム」）を得

たのである。３か月の滞在というのは、私にとっては当時の海外滞在歴では最長であった。院生時代に、留学経験のある先生方が「現地で生活して来い！」と仰っていた意味が少しわかった気がした。数週間程度の旅行ならばホテル滞在と外食だけでも過ごすことができるが、１か月を超えてくるとそうもいかない。滞在費を考えて部屋を確保し、食事も自炊が基本になる。そして、何よりも、じっくり研究できる絶好の機会である。私は、GISを通じてすでに何度か会ったことのあるメルボルン大学地理学教室のRay Wyatt准教授に受け入れ教員になっていただいた。毎週のように時間をとってもらい、オーストラリアの都市交通や、GIS関連のデータ事情について詳細に教えてもらった。こうした研究のベースを構成する基本的な情報を得ることができたことは幸運であった。そしてさらに、現在でも研究上のカウンターパートである同大のKevin O'Connor教授（現：名誉教授）と共同研究を開始したことは、私の研究人生を変えたといっても過言ではない。

前述の通り、私自身の研究スタイルはData drivenである。メルボルンの都心部には数多もの高層コンドミニアムが林立している。オフィスビルが主流ならばあまり違和感はないのだが、都心の一等地ともいえるような場所に50階建てを超すような住居の新築が相次いでいた。そこに住む人の年齢や性別、国籍、所得等々の特徴はどのようなものか。疑問が次々と沸いて来る。オーストラリアの国勢調査は質問項目が多く、こうした疑問を解消できるだけの緻密なデータがある。国勢調査の詳細なデータにアクセスできれば何か発見があるのではないか。当時の私は、ただただGISで出来上がる地図を想像しながら、やみくもに、そして自分の興味本位だけでデータを渉猟し、ついにいくつかの地図を描き上げた。そこから浮かび上がったことは、20代ぐらいの外国籍者が都心の高層コンドミニアムの住人として急増しているという事実であった。こうした発見事実をもとに、毎週のようにKevin O'Connor教授と議論を重ねた。国際的なヒトやモノの移動に関する研究を多く発表していたKevin O'Connor教授は、私が発見した事実はグローバリゼーションに伴う現象だという。国際的にも著名なメルボルン大学とメルボルン工科大学（RMIT）は、メルボルンの都心部から１～２kmという至近距離にメインキャンパスがあり、多くの留学生が学んでいる。学科によっては25％を超える留学生がいても珍しくない両大学では、学生たちが４人でルームシェアをしながら、都心の新築高層マンションに住んでいるらしいと教授は話してくれた。しかし、これらのことを証明する方法がない、とも教授は付け加えた。私の頭の中で、閃きが走った。私のもつGISの技術と組み合わせればある程度の証明も可能と思われれるので、これはよい共同研究になる、と。Ｅメールで打ち合わせをすることもできるが、やはり対面でのやりとりが研究の初期の段階では欠かせない。私は３か月の滞在を終えた後も定期的にメルボルンに通い、Kevin O'Connor教授と議論を重ねた（写真１）。

写真１　O'Connor教授との研究打ち合わせ
（2005年５月）

共同研究を進める上で私が留意したことの一つとして、１回の滞在中に可能な限り２回以上会ってもらえるようにスケジュールを組むことである。私の知り合いの海外研究者の中には、２か月以上前（航空券を取得する頃）から現地の調査対象者とのアポイントを入念に取り、現地滞在中の詳細な予定を日本出発前に組んでしまうという者もいる。しかし、ここだけの話だが(笑)、オーストラリア人は時間に対してはなんとなくのんびりした面がある。２か月先の予定をあらかじめ聞くというようなシチュエーションは私には想像できない。私が渡豪できる時期は、公務の関係から毎年８月後半～９月中旬、そして２月下旬～３月中旬あたりである。このことは先方もわかってくれている。私のアポイント取りの方法は、１か月前をメドに、いつも通り翌月に渡豪するという概要だけを伝え、実際にメルボルンに入る１週間前をメドに「来週行くのでいつなら会えるか？」というメールを送る。そうすると、たいていは「火曜のランチか、水曜の夜が都合が良い」というような返事が来る。私は早いほうの提示時間にメルボルン大学か、Kevin O'Connor教授の自宅近くのカフェに会いに行き、そこで研究の打ち合わせを進める。そして、メルボルンを離れる前日をメドに、２回目のアポイントをその場で取り付ける。滞在中の最初の打ち合わせ事項に基づいて改めてデータを探し、GISで地図化した様々なアウトプットを持ち寄って、２回目の打ち合わせをする。こうすることで、１回の滞在で論文の骨子が出来上がるのである。

幸運は続き、私は2009年にも、６か月の海外滞在（愛媛大学在外研究）の機会を得た。この時は、さまざまなエスニックコミュニティがひしめくメルボルン郊外に立地するモナシュ大学に籍を置いた。受け入れ教員を引き受けてもらった同大GISセンター長のDr. Xuan Zhuとも、私の渡豪の度に定期的に研究打ち合わせを行っている。このように、現地の事情に詳しいカウンターパートをもつことは、共同研究を進める上で不可欠なことである。将来的に大きな事象となるかもしれない「芽」ともいうべき情報が、現地の「定点観測者」との毎回のさりげない挨拶や会話の中にちりばめられている。

Ⅳ．現地でも認められるような研究へ

私が海外の調査研究を進める上で心がけていることがある。それは、現地でも通用する研究を行うことである。なるべく英語で論文を書き、オーストラリア人研究者がみても十分議論になるような中身である。日本で海外研究者といわれる人々の中には、残念なことに、海外で入手した現地資料を日本語に翻訳したり要約することばかりというケースがかつては散見された。これらの人々は「よこたて学者」と揶揄されたものである。横文字で書いたものを日本語の縦書きに直しただけ、という指摘である。

上述したメルボルンの高層コンドミニアムに留学生がルームシェアで住んでいるというテーマについては、私はKevin O'Connor教授との連名で英語で４本、日本語で１本の論文[2]をこれまでに発表して来た。これらの論文の多くは、事前に国際学会で発表を行い、世界から参加している都

2　例えば、堤・オコナー（2008）、Tsutsumi, J. and O'Connor, K.（2011）など。

市地理学者からもおおむね好評価をいただいた。私が書いてきた論文の多くは、厳しい見方をすれば、インパクトファクターもつかないマイナーな雑誌に掲載されたものにすぎず、学術的な価値は大して認められないものなのかもしれない。しかし、オーストラリアの地理学界で最も著名な地理学者の１人であるKevin O'Connor教授との共著論文が多くあるという事実は、私の国際的な知名度向上にも一役買っている（それがどうした、というツッコミもあるえるが・・・苦笑）。Kevin O'Connor教授から博士号を取得した弟子は世界中のアカデミックな世界で活躍している。そうした弟子たちの中で最も有名な人の一人は、都市経済地理学では世界的に著名なカナダのブリティッシュコロンビア大学（UBC）のDavid Edgington教授（現：名誉教授）だと思われる。アメリカのサンフランシスコで開かれたアメリカ地理学会（AAG）で発表した際に、David Edgington教授に会う機会があった。初見なので私から自己紹介したところ、「あなたの名前は前から知っているよ。Kevinとたくさん論文を書いているDr. Tsutsumiだろ？」との言葉が返って来た。皆には見えないように、小さくガッツポーズしたのは言うまでもない。私の研究業績の一部には、オーストラリアの学術雑誌に掲載されたものもある[3]。今後も、データを駆使して論文に仕上げ、オーストラリア人も興味関心を示すような研究成果を公表できるように努力したい。

Ⅴ．調査研究テーマの多様化　―プロデューサー的な仕事の拡大―

私は2012年９月、42歳の時に筑波大学に移籍してきた。博士後期課程は生命環境系地球環境科学専攻（当時）の担当だが、修士課程の主担当は国際地域研究専攻東南アジアコース（当時）である。特定の海外フィールドをもち、その専門家として職を得ることが出来たということは、地誌／地域研究の研究者として自信がもてるようになった。2012～2015年度、そして2019～2022年度（本稿執筆時に進行中）の科学研究費プロジェクトでは、他大学に所属するオーストラリア研究者と学内者１名を分担者に加えたチームとしての研究を進めている。科学研究費（若手Ｂ）で研究を進めていた頃は自分一人の興味関心を深掘りすればよかったが、チームを束ねる研究代表者となると、そうもいかない。そもそも、大きな研究予算を獲得するためには、「大きな絵」を描かなければならけない。都市地理学的な興味関心だけではインパクトが弱く、テーマとしてはピンポイントにすぎない。シドニーやメルボルンの成長という個別でミクロなテーマを考える際にも、アジア諸国を含めたマクロ的な考察を組み合わせることが有効である。例えば、オーストラリアの大都市では高級食材の牡蠣やマグロ、wagyu[4]を扱うレストランが数多くある。これらのレストランで提供される高級食材は、オーストラリア国内のみならず、日本やシンガポール、香港などを結ぶ冷蔵・冷凍流通システム（コールド・チェーン）の成長なしには供給できない。ヒト・モノ・カネの流れまでを俯瞰したグローバルな視点からオーストラリア国内の個

3　例えば、Tsutsumi, Jun and O'Connor, Kevin（2006）など。

4　オーストラリアで飼育されるwagyuは、日本の和牛の遺伝子を引き継いでいるものの、アンガス牛などとの掛け合わせであることが多い。日本の和牛とは遺伝子的には異なるものであり、また、オーストラリアで独自の市場が広がったこともあり、日本の和牛とは区別してwagyuと表記される。

別の産業の変化を考察することは、Kevin O'Connor教授とも継続的に議論を重ねているテーマでもある。現在進行中の科学研究費プロジェクトでは、豪中間の経済関係の変化、高級食材のグローバル流通、オーストラリアと東南アジア間の人的交流やノウハウの流通などからみたオーストラリアの経済地理的な特徴を解明すべく取り組んでいる。国際地域研究専攻、そして国際公共政策学位プログラムの一員として学際的な研究教育環境に身を置いている現在、痛感することがある。それは、オーストラリアという一つの地域を深く知る上で、学際的な視点が大いに役立っているということである。植民地時代から続くオーストラリアとイギリスとの持ちつ持たれつの歴史的・文化的関係、労働者の権利が保証され、伝統的に労働党政権が強いという政治的スタンス、第二次世界大戦から冷戦期にかけて進んだアメリカとの安全保障上の関係強化、英語ネイティブの国だからこその文学・演劇・映画等の国際的文化交流の活発さなど、私が地理学だけを専門にしていたのではとても気がつくことのできないことばかりである。こうした多様な視点を常にもちながらオーストラリアを理解しようすることはとても重要だと考えている。

Ⅵ．現地での調査Tips

私がオーストラリアに調査に行く際のTipsとして挙げておきたいことはいくつかあるが、最重要なものと考えているのが食である。2015年ぐらいまでは、生態系を保護する観点から、オーストラリアへの食品持ち込みは原則不可能と言われるほど厳しかった。その厳しさは尋常ではなく、肉類や乳製品、卵製品、生鮮果物などは完全不可、お茶や菓子類も原則として持ち込み不可であり、機内食で出たクッキーでさえ空港で没収されるほどであった。ところが、2016年頃を境に食品持ち込みルールが変更になり、未開封の市販品であれば原則として持ち込みできるようになった。そこで、近年では私は、スーツケース１つ分は白米や調味料、魚の缶詰、味噌汁、日本茶などの食材を詰め込んでオーストラリア入りしている（写真２）。そして、滞在先はキッチン設備のある部屋を選んで、基本は自炊で過ごしている。これは、外食コストの高いオーストラリアにおいて滞在費を安く上げるという経済的な理由もさることながら、最も重視していることは「食べ慣れた味で過ごす」ということである。地理学者の中には冒険心に溢れる人たちも多く（笑）、郷に入ったら郷に従えと言わんばかりに、現地の屋台からレストランまですべて外食で現地の特産品的な食べ物を制覇しようとする人たちがいる。ただ、このような行動は、かなりの高い確率で体調に支障を来すリスキーな行動と言わざるをえない。安全だという確証がある場合を除き、生水を飲まないというのは当たり前の常識ではあるが、調理器具を洗浄したり、普通の飲み物に添えられている氷などは現地の生水が元である。飲み水が不衛生な地域では、知らず知らずのうちに病原菌を飲み込んでしまうことは避けられない。私も中国・上海で市販品のアイスクリーム（値段は破格に安かった・・・）を食べた後、３日間ぐらいホテルで動けなかった経験がある。オーストラリアは水道水が飲める国として認定されており、確かに飲んでも腹を下したことはない。ただ、肉食中心の食生活が３週間も４週間も続くと飽きてくるし、胃もたれもする。日本で毎日食べている白米、味噌汁、卵焼き、魚などを中心とした食生活を送ることが、現地で

毎日フルにパフォーマンスを発揮する上では重要なことなのだと認識している。

また、オーストラリアにおいて重要なもの２点目として、現地での通信手段の確保を挙げたい。オーストラリアは国土が日本の20倍と広い割には人口が2500万人程度と少なく、インターネットの整備状況が悪く、料金も他国に比べて割高な印象である。Free Wifiが使える場合でも速度はかなり遅く、数MB程度の添付ファイルを受け取ることさえ難しいことも珍しくない。滞在場所の部屋にWifiが整備されていることは多いが、基本は有料であり、１日10豪ドル（１豪ドル≒79.5円、2021年１月４日）程度の出費を覚悟しなければならない。そこで、私はオーストラリア現地の電話会社が発行するモバイルルーターを端末もろとも所有している（写真３）。チャージしたデータ使用権利は１年間有効である。もちろん、海外からもチャージできる。そのため、私はオーストラリアのモバイルルーターを機内持ち込み荷物に入れ、日本の空港を出発する際にスマートフォンの画面からクレジットカードでチャージを済ませておく。オーストラリアの空港に着陸したと同時にモバイルルーターの電源をオンにすればすぐにネット接続ができる。また、現地ローカルの携帯電話も所有している。現地に着いた際に格安の旅行者用SIMをその都度買えば電話自体は使えるが、この場合は滞在の度に電話番号が変わってしまう。オーストラリア現地で連絡を取りたい相手に毎回電話番号を周知しなければならず、これは面倒である。そこで、私はロングライフ（チャージ後１年有効）のプリペイドSIMを購入し、2009年の滞在以来、チャージを繰り返しながら、同じ電話番号をずっと使用し続けている。１分あたりの通話レートは割高だが、毎回同じ電話番号が使える利点は、現地での連絡手段としてはとても重宝している。ローカルのSIMであれば、着信に料金はかからない。一方で、日本のスマートフォンを現地で使うことはできるが、着信も発信も料金が発生する。オーストラリアの知人たちも、オーストラリア国内にいる私に対して日本の番号向けに国際電話をかけてもらわなければならないのは気を遣ってしまう。「オーストラリアに着いたよ」とだけメール等で連絡すれば、あとはメールでもローカルな携帯電話でも連絡が付くというのは気楽である。

写真２　オーストラリアに持ち込む自炊用の食材の例（2017年３月）

写真３　オーストラリア現地の電話会社のプリペイドWifi ルーター

そして、最後にもう一つの注意点は、セルフメディケーションである。私はオーストラリアはもちろん、それ以外の国であっても、滞在期間の長短にかかわらず、現地の医療費用をカバーする海外旅行保険の契約をして出かける。と、ここまでは、たいていのみなさんも

同じであろう。それとは別に、51歳まで生きてくると、この喉の痛みは風邪の前兆だとか、これは咳・痰だけでたいていは悪化しないな、とか、頭痛が起きるかもしれない・・・といった自分なりの感覚がある。そして、この症状の場合は医者からの特定の処方薬を飲めばすぐに回復するといった感覚もある。そこで、私は海外に出る際には、たいてい１週間分かそれ以上の処方薬を持参するようにしている(写真４)。なぜ１週間なのかと聞かれれば、かつては３日分を目安に持って出かけていたのだが、まだ気温の低い３月にアメリカ・シカゴに渡航した際に、厳しい寒さゆえに不覚にも風邪をひいてしまった。折しも、日本を出発前には花粉症にも悩まされており、花粉症と風邪のダブルパンチで鼻汁が大変なことになってしまった。喉の痛みも併発してきてしまい、抗生物質を含む３日分の手持ちの常備薬は底を突いてしまった。私は幼少期から中耳炎になりやすい体質であり、薬は切れたのに、耳の痛みまで発症してしまった。耳が痛いまま12時間以上も飛行機に乗ったままなのは、まるで拷問である。そこで慌てて、旅行保険でカバーできる現地の医者まで出向き、薬を処方してもらってから翌日の飛行機で帰国した経験がある。それを境に、常備薬は３日では足りないと考えるようになり、１週間程度を持つようにしている。私がオーストラリアに出かける８月～９月あたりは、南半球のオーストラリアではまだ寒い日も多い。風邪の症状が出てしまって３日分を超えて処方薬を飲んだことも、その後も何度か経験している。自分で体調を整えることができることは、海外調査時には重要なことなのではないかと考えている。ちなみに、私は胃腸は丈夫な上、自炊が中心で無茶な飲食はしないようにしていること、そしてセルフメディケーションで対応しているため、オーストラリアで体調を崩して何日もベッドに寝ていたなどという経験は、今の所ない。

写真４　持参する常備薬（処方薬）の例

Ⅶ．海外研究を始めるあなたへ　―むすびにかえて―

海外フィールドに飛び出すのは早ければ早いほうがよい、とよくいわれる。これにはもちろん一理ある。しかし、右も左もわからない状態で海外に出ても、語学習得以上に時間がかかるのは、研究者としての問題関心の置き方である。

「自分の包丁を磨け」というような表現を筆者も院生時代に教員や先輩方から教わったが、全く同感である。私自身について振り返ってみれば、本稿でも何度か挙げてきた「データを詳細に集め、GISで地図化することを通して背景に隠れた要因を考察する」という研究手法の柱は、修士論文を書いている際に大筋が固まったものである。この研究手法を軸に据えながら、博士論文

執筆のために事例を追加し、海外研究を始めた際には、この「包丁」でオーストラリアのデータを「料理」した。そして重要なことは、まずは自己流の料理でも、なんとか食べられるものが出来たということである。少なくとも修士論文の研究手法を確定し、自分なりの「型」を作ってから海外研究を進めることで、結果的には相対的に短い時間で論文という果実を手にできるのではないかと考えている。

また、本稿ではあまりふれてこなかったが、語学力は言うまでもなく必要である。調査そのもので使うほか、現地の人たちとのコミュニケーションで使う語学力はもちろん、現地で長期間にわたる生活中に起こるさまざまなトラブル対応・クレーム対応という点からも、きちんと言いたいことを言えるだけの語学力は必須である。例えば、水が出ない、お湯が出ない、エアコンが効かない、お釣りが足りない、体調が悪い、荷物が無くなった、郵便が受け取れない等々。それぞれの場面では、言うべきことを言わないと、問題がないと判断されてしまい、誰も助けてくれない。

とはいえ、ぜひとも、若い皆さんには、海外での調査に挑戦してほしい。結果は後から付いて来ると信じて。

参考文献

堤　純 編 2018『変貌する現代オーストラリアの都市社会』筑波大学出版会。

堤　純，オコナー・ケヴィン 2008「留学生の急増からみたメルボルン市の変容」『人文地理』60，323-340頁。https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjhg/60/4/60_323/_article/-char/ja

Tsutsumi, Jun and O'Connor, Kevin. 2006 “Time Series Analysis of the Skyline and Employment Changes in the CBD of Melbourne”, *Applied GIS* (Monash University ePress), 2 (2), pp. 8.1-8.12. https://doi.org/10.4225/03/58006b20c6ef5

Tsutsumi, Jun and O'Connor, Kevin. 2011 “International Students as an Influence on Residential Change: A Case Study of the City of Melbourne”, *Geographical Review of Japan Series B*, 84 (1), pp. 16-26. https://www.jstage.jst.go.jp/article/geogrevjapanb/84/1/84_1_16/_article